

令和5年度 伊那市立伊那小学校評価表

学校関係者評価；(A：十分達成された B：ほぼ達成された C：不十分であった) 自己(項目間相対を加味した到達度)評価(a：十分達成された b：ほぼ達成された c：不十分であった)

学校教育目標	重点目標(中長期的目標)
『眞事眞言誠』 児童の目標 1 こつこつ勉強する 大きな自分を作り上げるために、勉強をこつこつやり、しっかりと根をはる。 2 友がきをつくる 一人ひとりの友だちが、みな同じように伸びていくために、助け合い励まし合っている友がきをつくる。 3 とことんやり抜く 誠実に、自分のありのままを出し、とことん求め続ける。	1 豊かな学びを創造するための教師力の向上 学年研究会・連学年研究会の充実 確かな学力の定着とさらなる向上 2 「つながり」「関係性」の中で子どもの育ちを捉える 幼稚園・保育園、中学校、保護者、地域とのつながり
	今年度の重点目標
	(1)「総合学習」「総合活動」等の探究的体験的な学習・活動を通して、子どもたちが如実に分かっていく(学び)を旨とする。教科学習においても、子どもの思いや願いから展開し、学びと子どもの生活が乖離しない授業づくりに努める。 (2)校内教育支援委員会の充実、また関係機関との連携により、個別の支援を要する児童や不登校傾向のある児童への支援に重点を置き、児童一人ひとりにとって楽しい学校づくりをめざす。 (3)地域の協力を得ながら、地域に根ざした活動を展開し、児童がふるさとを愛する心情を育てる。

総合評価		
○年間7回の全校学習指導研究会、信州大学教授 畔上一康先生による年3回の全体指導等を経て、研究の成果の発表の場として公開研究を実施し成果を得る。 ・参集で行われた公開学習指導研究会に、全国から約600名余の方の参会を得て、様々な立場からの意見をいただく中で、子どもにとらえを見直し、子どもの思いに寄り添った支援、授業を子どもと創る教師のあり様等について学ばせていただく貴重な機会となった。 ○教師の姿として以下の視点で更に研修を続けて行く。 1 協働的探究者としての教師 2 共感的対話者としての教師3 総合的・横断的な教育計画		
成果と課題	評価	改善策・向上策
(1) 総合学習・総合活動を通して、子どもがワクワクして学校に来れる環境づくりに努めてきた。子どもたちが体験したことで得た感動や疑問を出発点として探究することで、子どもたち自身が学ぶ楽しさや価値を理解できている子が多い。また、教師も子どもの思いに寄り添いながら、自分のあり様を問い直している。さらに、教師の願いをしっかりともちながら、そのこだわりにとらわれず、子どものありのままを受け入れ、子ども一人ひとりに生きる力を確実に育てていきたい。	A a	○声となって出てこない子どもの(言葉)を少しでも聴くことができるよう、子どもと共に追究し、対話しつつ学ぶ教師であるよう、日々の振り返り(リフレクション)を積み重ねていく。 ○「学力」について吟味しつつ、客観的な評価(全国学力状況調査、ベネッセ総合学力調査等)も行いながら、基礎学力の定着について実態を捉え、総合の学びが生かされるようにしていく。
(2) こども相談室、教育事務所S S W、児童相談所、医療機関、カウンセラー等外部機関との連携を進めることができているが、具体的な改善にすぐに至らないことが多く、継続した連携が必要である。	A b	○家庭状況や子どもを取り巻く環境の複雑化などで、学校だけでは支えきれない事案が多くなっている。今後も外部機関と連携し継続的に対応していきたい。また、スクリーニングも定期的に行っていく。
(3) 「林での活動」「ラーメン作り」「プラネタリウム作製」「飼育」等の活動において、地域に住む専門家からご指導いただくことができた。また、本年度は6年生が2年間の集大成として、市長に伊那北駅前公園についての提案をしたり、ラーメンを地域の方にふるまったり、プラネタリウム映写会を行ったりすることができた。	A b	○「みまよせの子等を育てる会」、PTAの校外指導委員会、交通安全委員会との連携を図り、児童の登下校中の安全確保にさらに努めていきたい。特に通学路の安全点検や改善に向けての具体的な取り組みを地域と連携し考えていきたい。

領域	対象	評価項目	評価の観点
教育活動	教育課程	○学級における教育課程(年間学習計画)の編成 本校では学習指導要領に示される目標を総合学習、総合活動・教科・道徳・特別活動について学級ごとに年間学習計画を作成し、子どもたちにつけたい力を具体化している。	○学習指導要領に基づいた教育目標が総合学習、総合活動・教科・道徳・特別活動、外国語活動の中で横断的・総合的に位置づいているか。 ○具体的な目標と年間学習計画を立てると共に、子どもの求めや願いに寄せ、常に修正しつつその具現に努めているか。 ○子どもたちの実際の学びの道筋が表れたものになっているか。
		○学習指導要領にそった本校教育課程の方向付け	○本校の総合学習・総合活動を中心とした編成となっているか。 ○学習指導要領の趣旨を生かしたものとなっているか。 ○職員の共通理解と内容理解やそのための研修を行っているか。
	学習指導	○基礎・基本の学力の定着 ○予測不能な未来を自ら切りひらいて生きていく(力)の育成	○題材を通してつけたい力が明確になっているか。 ○子どもが自ら「問い」友と共に追究し合う授業づくりを創造しているか。 ○子ども目線で教材研究を行い、子どもと共に課題追究しているか。 ○個の姿をとらえ、個に応じた支援ができているか。
		○人権教育	○人権教育を全教育活動の中でおこなっているか。 ○自他の日常の言動に留意し、問題だと感じたことに対してその場で適切な支援・指導ができているか。
	生徒指導	○迅速に誠実に対応できる体制組織(集団不応、いじめなどへの対応)	○児童の実態の把握は適切か。 ○課題に対して迅速に的確に対応できる組織となっているか。 ○対応と共にその見返しはできているか。 ○いじめにつながる行為を積極的につかみ、「いじめ防止対策委員会」等で協議し、適切に指導しているか。 ○対応後の見届けを丁寧に行っているか。
		○外部機関との連携	○行政、市教委、医療機関、カウンセラー、地域との連携体制はできているか。 ○コーディネートは適切か。
学校運営	安全	○登下校(通学路)における安全 ○教育活動中の安全確保 ○危険箇所への早急な対応	○地域・警察・PTA間で危険箇所等の共有は図れているか。 ○危険箇所改善への対応を行っているか。 ○具体的で丁寧な安全指導ができているか。 ○道具の安全な使い方指導・適切な道具・身支度。
		○危機管理体制の整備	○危機管理体制の整備は適切か。 ○危機管理マニュアルを活用した訓練は行っているか。 ○緊急事態発生に向けて適切な検討をしているか。
	地域との連携	○地域・家庭との連携	○総合学習・総合活動等の学習を通じての連携の深まりが見られるか。 ○個人懇談、家庭との連絡等により、家庭との信頼関係を築いているか。 ○地域と連携し、子どもの安全を守る取組ができたか。
○学校からの情報の発信		○学校便り、学年便り、学級便り等によって子どもたちの姿を伝えることができているか。 ○マスコミの取材や教育関係の情報紙等で学校の姿を正しく伝えているか。	

成果と課題	評価	改善策・向上策
○年間学習計画を子ども学びの歩みに応じて、修正しながら教育課程を編成した。 ○学年内、連学年、全職員で定期的に見直し更新する機会を設けたことで、子どもの願いからなるカリキュラムについての重要性を再認識し、実践を重ねることができた。 ●子どもの思いや願いの先に広がる学びの可能性を熟慮し、発想→構想→実践→自己評価という意欲のサイクルがどの教科でも回るようにさらに工夫していく必要がある。	A a	○中心となる活動の素材の価値を見極め、そこから広がる学びの可能性を見通すことができるよう、学年研を中心に教材研究をさらに充実させていく。 ○学年研究会・連学年研究会のさらなる充実を図り、日常的な語りと研修により、互いの実践に学び合う場を大事にしていく。 ○文献や資料のみでなく、体験的、協働的な教材研究に努めていく。
○総合研究会、先輩の先生による講演会、人権教育、特別支援教育研修会などを通して、伊那小が大切にしている「子ども観」「授業観」「教師観」について理解を深めることができた。	A a	○今求められている「教育」「学力」について検討し、時流に流されることなく、本校にとって不易なるものを見極め追究していく。
○学習課題を持ち、そこから自ら追究する姿勢が多くみられた。 ○体験をもとに協働的・対話的な学びを進めることができた。 ●一人ひとりの子が「できた」「わかった」「楽しい」と思える授業を、様々な授業で行えるようにさらに総合を生かした授業改善に取り組んでいきたい。	A b	○対話的、協働的な授業づくりにより一層努めていく。 ○子どもの生活と教育課程が乖離しないよう、子どもの求めや願いに立った研究実践を積み重ねると共に、子どもと創造する授業を志向した教材研究に努める。 ○必要に応じた授業の「UD化」「合理的配慮」の推進に努めていく。
○人権講演会、校長講話、なかよし月間の取組等を通して人権感覚が高まった。 ●様々な子がいること、いろいろな意見があることが自分を豊かに成長させることを自覚し、物事を前向きにとらえる力をさらに育てていきたい。	A b	○研修の機会を大切にしながら、教師自身の人権感覚を高めていく。 ○人権的な問題についてはその場でその時に適切な指導を行っていく。 ○活動の中にある道徳的価値を見極め、子どもたちが自ずと思考判断する場を設ける。
○担任、教科担任(専科)、養護教諭、教頭など、様々な立場の職員が児童の気持ちを受け止めるよう努め、組織的に対応できた。 ○児童による器物破損や、給食残飯を隠しておく行為などが昨年に比べ減少した。 ●小さなトラブルでも「いじめの芽」と捉えて丁寧に対応していく必要がある。児童や保護者の思いを受け止めながら、全児童を全職員と全保護者で育てていくという共通理解をもち取り組んでいきたい。	B b	○教師側の言動や子どもの見方・捉え方を見返し、本校の子ども観を基本として子どもの良さが引き出せるような支援を目指し研鑽していく。 ○問題と思われる行動の背後にあるもの・ことに目を向け支援していく。 ○日々の生活、授業(道徳を中心とした教科全般)を通して、「いじめ」や「差別」はどんな理由があっても許されないことについて具体的に指導していく。
○外部機関との連携により、より具体的な支援の方向性を見出すことができた。 ●児童だけでなく家庭支援が必要なケースが多くなっている。それらのことから関係機関とのさらなる連携が大切になってくる。	A a	○外部機関との連携を一層図っていく。 ○子ども相談室、スクールカウンセラーなどと継続的に会合を持ち、チームとして支援をしていく。
○PTAと共に「街頭指導」を行い、児童の安全意識を高めることができた。 ○通学路の危険箇所について地域と共通理解ができた。 ●登下校中の児童のいたずら等による苦情が何件か寄せられた。今後も下校監視等を行ってほしい。	B b	○伊那小C SやPTAの担当委員会との連携をして危険箇所の早期改善に向けて積極的に活動していく。 ○非常時を想定した下校(引き渡し)訓練等行っていく。 ○学校だより等で保護者に啓発していく。
○危険箇所を認知した際は素早く対応・改善することができた。 ○避難マニュアルに基づいた避難訓練を行うことができた。 ○土砂災害危険地域であり、土砂災害となった際には本校は避難場所とならないが、避難が屋外となってしまったため、今後検討が必要である。	A b	○最悪の状況を想定し、素早的確に組織で対応できるよう、職員会議や職員朝会、学校運営委員会等の場で職員の意識を高めていく。 ○登校坂の歩き方についての課題意識を高め、定期的に見直し安全を図る機会を設けていく。
○総合学習・総合活動で地域に出て、あいさつを交わしたり、物事をお願いしたりすることを通して、地域の方から様々な協力を得ることができた。 ○読み聞かせボランティアの活動が再開し、子どもたちも地域の方の読み聞かせを楽しむことができた。	A b	○「総合学習」「総合活動」を中心に、地域と学ぶ実践をさらに進めていく。 ○家庭の理解協力を得ていけるよう発信、日々の連絡・相談などさらに大切に。家庭からの意見に耳を傾け、改善すべき点は素早く対応していく。
○その時々学校・学級の出来事やお願い事項等、学校・学級便りにて丁寧に具体的に伝えるよう心掛けてきた。 ○各種取材に対しては、本校の大切にしているものが発信できるように配慮してきた。	A a	○「総合学習」「総合活動」が教育課程の柱であること、通知表がない意味等、家庭の理解を図れるよう、子どもの成長の姿を具体的に丁寧に伝えていく。 ○マスコミ等に対しては、学校が大切にしていることを広く発信できる機会となるように配慮しながら対応していく。

	○PTA活動の充実	○子ども・PTA会員にとって意味ある活動になっているか。 ○PTA主体の活動になっているか。	○コロナ前まで行っていた伊那小バザーを伊那小フェスとして、各クラスの総合にかかわる販売活動やフードドライブなど新たな取り組みができた。		○コロナ禍の中で見えてきた、PTA活動の大切さや新たな可能性について検討し、子どもと会員にとって意味ある活動を行っていく。
研 修	○教育哲学	○唐木順三先生の「朴の木」を読み合わせ、各自が日々の自分の実践や子どもとのかかわりを重ね合わせながら教育に対する姿勢を磨いているか。	○年間5回の「読み合わせ」や、「まとめの会」における先達による講演等を通して、人として、教育者としてのあり様を省み、同僚と語り合うことができた。	A a	○子どもたちの前で理想（教育哲学）を語る教師であり続けられるように、読み合わせを今後も大切にして継続していく。
	○総合・授業研修	○職員が互いの授業実践から学び合い「協働的な探究者」「共感的な対話者」としての教師であるよう研鑽を積んでいるか。	○年間7回の校内学習指導研究会、子どもの学びや育ちの捉えを検討し合う研究部会を通して、教材研究のあり方、教師のあり方等について学び実践に生かすことができた。	A a	○子どもの事実を根拠に、自らを見つめ問い、子どもと創る授業、子どもと共に探究する教師のあり様を追究し実践を重ねていく。